

「京都を起点に東北にできることを考えていきたい」と話す団士郎さん(8月20日、京都市中京区・ウイングス京都)

「家族の物語」で 漫画展 被災地にエール

立命館大学院教授(家族療法)で漫画家の団士郎さん(65)が、東日本大震災の被災地となった東北各地で、家族をテーマにした漫画の展覧会開催や冊子の配布に取り組んでいる。描くのは、さまざまに困難に直面し、迷いながら気付き、乗り越えていく姿。「心が折れそうになったとき、家族の物語には不運しかないわけではないことを思い出して」と応援の気持ちを込める。

団士郎・立命館大学院教授が東北巡回

漫画展は同大学応用人間科学研究科の「東日本家族応援プロジェクト」の一環で、初年度は昨年9月から青森県むつ市と岩手県遠野市、福島市、福島県二本松市の4都市で開催してきた。東北各地で10年間続ける予定で、今年8月には京都市でも開催された。パネル展示する漫画は団さんが雑誌で連載して



まで出会った家族のエピソードを元としている。「過去・現在」という作品は、大学に社会人入学した年配男性の話。定年後の生き方のモデルだと受け止めていたら、実は過去に災害で妻と長女を亡くしていたことが分かる。男性は次女を育て上げた後、自分のためにもう一度勉強しようと思いついたのだという。

「家族にはいいことばかりではなく、いろんな待ちの人たちに説明するよう、彼女にうながす。彼女は大声で事情を説明し、無事にタクシーに乗せてもらう。」
この作品に対して、読者から「団さんが代わりに頼むべきではないか」との感想が寄せられたと言ったが、団さんは「自分の子を守っていくために彼女が自分でできるようにするのが本当の親切では」と考える。
ほかに、不登校や結婚、子どもの成長と挫折などを題材にする。結論付けず、自分ならどう対応するか、どんな方法があるのかと、投げかける。福島市の会場では、作品の感想を述べるより、

団士郎さんが東北各地で無料配布してきた「木陰の物語」



震災後の自分の家族の状況を語り出す人たちがいたという。

「思いがけないことが起きたとき、そこからどうするか。同時代を生きる自分以外の家族の物語を知ることは力や知恵になるはず。3・11を経験した人たちがスタートするための応援になれば」と話している。

展示だけでなく、漫画を文庫サイズの「3・11への記憶」に再編、会場無料で配布してきた。さらにこのほど2冊目「追憶の一步」が完成した。東日本大震災の被災を乗り越えて未来へ歩んでいく願いを込めた。

「追憶の一步」は希望者にも1冊ずつ贈呈する。本が入る封筒に自分で宛ての住所を記し、140円切手を貼って同封し、〒110-7100 62

東京都港区南青山2-14-7 ホンブロックに郵送する。締め切りは21日(消印有効)。問い合わせはホンブロッケン03(5775)1612。

(日下田貴政)